

DRAMATIC KYOTEI

舞え、勝利の桜吹雪。

開設54周年記念

GIびわこ大賞

4/4 TUE 5 WED 6 THU 7 FRI 8 SAT 9 SUN

■主催/滋賀県 ■後援/関西スポーツ新聞5社

期間中イベント

- 〈1階中央多目的ホール特設ステージにて〉
- ④ 選手紹介 (10:10~10:30)
 - ④ さくらドリーム出場選手インタビュー (10:30~10:40)
 - ④ **「ふじいあざら」マジックショー** (第7R・第10R発売中)
 - ④ びわこドリーム出場選手インタビュー (10:30~10:40)
 - ④ **「松田雅文&山本泰照」競艇OBトーク** (第7R・第10R発売中)
 - ④ **「インスタントジョージ」爆笑ライブ** (第7R 第10R発売中)
 - ④ 優勝戦出場選手インタビュー (第6R発売中)
 - ④ 優勝者表彰 (第12R終了後)
 - ④ **「海原やすよ・ともこ」爆笑ライブ** (第7R・第11R発売中)
- 「ハレンチ★パンチ」ライブショー (第10R発売中)

ファンサービス

- ④ ラッキーカード当選者200名様に「オリジナルクオカード」進呈!!
- ④ 先着入場者3000名様に「必勝勝票」進呈!!

4月4日16:00~16:55
びわこ放送・KBS京都・瀬戸内海放送

4月9日16:00~16:55 びわこ放送
16:30~16:54 サンテレビ

スイリとスリル びわこ競艇

■無料バス発着場/JR大津駅・JR西大津駅

■テレホンサービス(レース結果・開催案内)/077-527-0999 ■電話投票競艇場コード11#

多く知りたい競艇情報がほしい!

<http://www.kyotei.or.jp/>

びわこ競艇ホームページ <http://www.biwako.gr.jp/>



ネオンアーティスト

安彦哲男

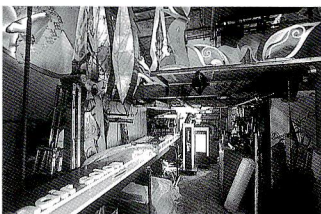
ABIKO TETSUO

【プロフィール】 京都出身。小学校在学中には上京美術研究所で油絵を学び、中高時代にはサッカーに夢中、大学時代ヨーロッパを放浪し、ロスでの遊学中にネオンアートに魅了される。1988年に再度米し、帰国後アート活動を始め現在に至る。

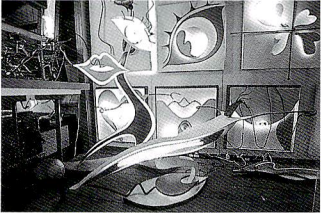
京TIAN I.D.
キョーティアンアイディ

The 129th person

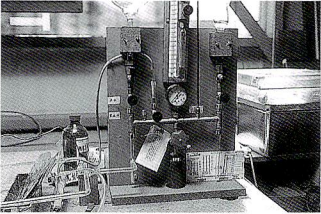
**作品に込められたメッセージ
ネオン=看板と思うこと無かれ**



1階の作業スペースに陣取っている看板は、安彦氏がプロデュースしたサロン「hair art Lien」のもの。「看板屋に非ず」の姿勢は確固たるものだが、空間プロデュースを請け負えば、看板もその一部として作成する



壁に掛けられた作品は「LOVE PROCESS」と題して、2004年2月の個展作品集。順にテーマがあり、ストーリーが存在する。手前に置かれているのは、サッカーをモチーフにした作品。学生時代の経験が活かされている



アメリカ製「マニフォルドシステム」、別名「お茶の水博士」(安彦氏命名)。要は「ガス入れ機」。日本製は緻密すぎて逆に使いにくく、「何でもシンフルな方がいい」と安彦氏。ちなみに日本製だと800万円はする代物

「ネオン」と聞いて、何を思い描くだろうか。「パチンコ」「場末のスナック」あたりが正直なところではないか。欧米では既に確立されているネオンアートも、ひとたび日本に降り立つと、まだまだその程度の認識しかないのが現状だ。そんな中、「ネオンアーティスト」として作品をつくり続けるひとりの男性がいる。安彦哲男、その人である。'80年代、ホームステイ先のL.A.でバーに輝くネオンを見て衝撃を受けた。だが、その後しばらくは写真を撮り続け、家業である染色業を継いだ。再びネオンに触れたのは30歳になってから。実家の染屋を廃業し、決意強く再度渡米。そしてネオン制作の専門学校で技術を習得した。ところが、日本へ帰ってきても仕事は全くない。アートというより、看板屋としてしか扱われないことにジレンマを抱いた。「メッセージがないのは作品ではない」と言う安彦氏にとって、自分はあくまでもネオンを使って作品をつくり、その作品で自分の内にあるものを表現するアーティストなのだから。「僕が見てきたラスベガスの看板はメッセージ性がある、博物館に展示されたり」と、アメリカでの理解度を羨ましく思う。

「周囲に理解されるようになったのは、10年前に高台寺で個展を開催してから」と、当時を振り返る。建築物の中にネオンを取り入れる表現方法に対して、実際に見てもらって生まれた数々の信頼。西大路三条のとあるビルには「光の森」と題した小さなミュージアム的空間をプロデュースするまでに。現在、ネオンアーティストとして活動しているのは、日本で安彦氏だけと言っても過言ではない。そんな彼が京都を離れないのは訳がある。「ここには常にエネルギーが流れている。モノづくりにはとてもいい環境」。生まれ育った土地であることはもちろん、感性を刺激するエネルギーの波動、面白い友人たち、彼らから得るいくつもの縁。全てが安彦氏のモノづくりを支えている。「ロスに帰ろうとか、アムステルダムに住もうという気持ちはあっても、東京へ行こうという気はない」。「ゴッホやフェルメールなど、オランダの作家は光を大切に作品を生み出している。だからこそ、自分も一度オランダに住んで作品づくりをしてみたい」という想いから、今のマイブームは「アムステルダム」だという。とはいえ、当分は京都を拠点に活動していく彼の、「ラブ&ピース」をモットーにした作品から多くのメッセージを受け取ってほしい。

Information

STIMULATION IN FOREST

期間：2006年4月1日～10日
時間：17:00～21:00
場所：月真院(高台寺塔頭寺院)
京都市東山区下河原町528
ねねの道沿い
<http://www.bico-neon.com>